『Q 方法論による会津若松市における若者定住促進の可能性―記号地域定住化策分析と提案―』

指導教員：箕輪允智
代表者：丸田明広
発表者：丸田明広　中川輝　鈴木梨恩
参加者：丸田明広　中川輝　鈴木梨恩　白石優介　赤坂直人　竹川蒼空　山本凌
　　慶久智哉　佐野友哉　宮崎郁海　松永拓真　三澤諒

梗概

本論文では会津若松市における若者定住促進の可能性のため、Q方法論という調査方法を用いて解決策を提示する。第１章ではQ方法論についての説明を行う。Q方法論は特徴的な視点を総体的に明らかにすることによって、認識や態度を体系的に「理解」することができる。この調査方法は少ないサンプルを用いて行うため実証力に欠けるといったデメリットが存在するが、定住に関する意識について対象者の考え方の類型を見出すことで、会津若松を定着したい街として響くターゲット層を見つけることができるというメリットが存在する。第２章ではQ方法論の調査・分析概要についての説明を行う。私たちは若者のデータを収集するために会津若松市中高生、会津大生、東洋大学生に調査協力を依頼した。Q方法論では私たちが定住にまつわる調査項目を基に４３の項目を厳選し、回答者に重要度に応じてピラミッド型に配置されたマスにQセットの項目カードを配置するものである。このようにして回答者の定住に関する考え方をデータに表すことができる。第３章では調査で得たデータを集団ごとに主成分分析にかけ集団ごとに３～４つの因子を抽出した。因子を抽出することで各因子が定住に関してどのような価値観を持っているかということを具体的に解釈することができる。第４章では第３章の分析結果から施策を提案する。定住可能性が低い因子に対する政策は効果が薄いためそれ以外の因子についての政策を提案する。その定住可能性の高い因子とは「地域活性化型」・「親心重視型」・「ワークライフバランス型」である。これらの因子は行政サービスの改善・向上、伝統文化産物の重宝・広報、子育てや仕事面での暮らしやすい環境、バスの便数や路線の増加を望んでいる。これらの因子の希望を叶えることが若者定住を実現する初期段階としては理想的な政策である。少子高齢化、人口減少、東京一極集中が進む中、会津若松のような地方都市は人口減少の緩和から取り組むべきである。

はじめに

「地方都市における若者の定着～若者に選ばれるまちの実現に向けて～」というテーマに基づき箕輪ゼミ（以下　本ゼミ）が提案するのは「人間総体の価値観傾向把握調査に基づく、定住可能性の検討を行ったうえでの戦略的提言の必要性に基づく戦略的政策提案の必要性」である。日本では人口減少・少子高齢化が進み、国全体として若者の数が減少している。それに加えて近年では「東京一極集中」と呼ばれるように若者が東京（都会）に強いあこがれを抱き、大学進学や就職と同時に地元を離れるといった動きも多くなっており、地方都市における“若者離れ”に拍車がかかっている。実際に全国の自治体の 49.8%が消滅可能性都市（若者女性が 2020~2050 年の３０年間で５０％以上減少する自治体）として指定されている。（人口戦略会議（2024））　このような状況下で今後、全ての若者を対象にみんなにとって選ばれるようなまちを目指し、定住人口の増加、ましてや若者の定住人口が増加するということは現実的ではなく不可能であろう。若者を一つの総体的なものとして捉えて、「若者全体」を対象とした定住人口を増やすのを目的とするのは難しい。しかしながら、会津若松市のような地方都市の既存の魅力を磨き、それを選択理由として定住し続ける可能性の高い人々、一度地域を出たとしても戻ってきたい意向のある人々、都心などからの定住意向のある人は存在するだろう。そのような意向や可能性のありそうな人に対して戦略的にアプローチをすることが若者定住に対して最も効果があると考えた。そこで私たちは Q 方法論という心理学で開発された手法を用いて、本来無数に存在するはずの人間それぞれの考え方を相対的に把握し、幾つかの傾向の類型として示すことができる調査方法を活用し会津若松の若者（中高生、大学生）と都心の大学生が定住に関してどのような価値観を持っているのかという点で類型分けを行う。その分類分けをもとに、会津若松と都心の若者の定住可能性がある類型を抽出し、それらに対して効果的な提案を以下で行っていく。

第１章　Q方法論について

１．調査の狙い

上記のように、会津若松市には、生活基盤や文化面において十分に発展している部分があるものの、一方で少子高齢化や地方の過疎化の影響もあり、若者人口が減少してきているという側面もある。私たちは、同市への若者の定住者を減らさない制作を考を考えるため、同市内と私たち大学内で主に若者の方を対象にアンケート調査を実施した。

私たちのこの調査における狙いは次の２つである。

①そもそも会津若松市及び周辺在住の若者は定住に関してどのように考えているのか。

②潜在的な UI ターンとなり得る東京周辺の若者は、定住に関してどのように考えるのか。

これらを把握するために私たちが行ったアンケートは一般的なものではなく、今回の主役の「Q方法論」という調査方法である。

では、Q方法論はいったいどのようにして行うのか。その主な手順を以下に列挙する。

２．Q方法論の流れ

①アンケートの質問項目（Qセット）に回答者が答える。

②回答者は答えたQセットを一定の分布に従って（例：好きな順、重要だと思う順）並べ替える。（※並べ替える作業をQ分類という）

③アンケート結果を分析して、回答の傾向を出す。

簡単に言えば、Q方法論は一般的なアンケートにQ分類というひと手間を加えたものであり、Q分類が無い場合だと一般的な方法であるリッカート法になるのだが、各特徴を下記で表に示す。

Q方法論の特徴は次の表のように示される。(Ho(2017),林ほか(2020)をもとに作成)
○は各手法の長所、×は短所を指す。

	リッカート法	Q方法論
研究目的	一定の基準に基づく一次元的尺度を適用して、認識や態度を経験的に「測定」すること	特徴的な視点を総体的に明らかにすることによって、認識や態度を体系的に「理解」すること
データ収集	○経済的で効率的 ○親しみのある形式；参加者は、尺度の記入をするのに多くの指示は必要としない ○実施は容易 ×統計的検出のために、多数の参加者サンプルが必要 ×理論的定式化と研究者による構成概念操作化い基づいて尺度が作られる	○異なる視点が得られるよう少数の目的に適った参加者のサンプリング ○参加者は、自分自身の解釈と意味を創出する ○参加者は、構成概念の異なる領域に由来するアイテムを、その間やその内部で複合的に比較する ×分類行為は、用意されたサンプルの範囲に限定される ×参加者は、詳細な指示を必要とし分類を完成するためにはさらに時間を要する

	×社会的望ましさのバイアスやレスポンス・セット・バイアスの危機が大きい	×実施に先立って多大な準備を要する
データ分析	合計得点法を用いたアイテム中心のアプローチ 〇構成概念の正確な数値測定を提供する 〇記述統計や推測統計を用いた分析が容易 ×個別の測定尺度アイテムが合計される前に価値ある情報が失われる	人による因子分析又は主成分分析を用いた人中心のアプローチ 〇分析を通じて視点は損なわれることなく維持され、検証対象となる構成概念は全体として理解されうる ×結果を他の変数と容易に関連づけることは出来ない
結果の解釈	〇規則的な得点の変化は容易に比較が可能 〇グループ間の数的比較はパラメータテストを用いて容易に示され得る 〇統計的有意性に基づく解釈 〇代表的サンプルからのデータは、より広範な集団についての推計に利用可能 ×知見を実施に移し替えるのは困難 ×認識や態度が回答者やグループ間でどのように異なるかに関して、得られる知見は限定的	〇意味と応答パターンは保たれる 〇認識や態度がどのように異なるのかのニュアンスは、刺激アイテムの異なる配置によって際立たせられる 〇認識や態度が、異なる視点のどこかに収束するか、あるいはどこで別れるかについて、的確に指摘する 〇同じように考える人たちにとっての一般的な視点を明らかにする 〇視点はその全体として調査され比較され得る ×複合的なQ分類についての研究者の解釈に基づき、支店が記述される ×小規模なサンプルのため、母集団の推計は出来ない

表１リッカート法とＱ方法論

表１のように、Q方法論は一般的な調査法と比べて特徴が大きく異なるのだが、その上で、私たちはなぜQ方法論を利用することにしたのかを次に列挙していく。

３．なぜQ方法論を用いるのか

一般的なリッカート尺度を用いた調査では、サンプル全体の認識の傾向しか捉えることができない。一方で、人間の考え方や価値観は本来多様に存在する。

心理学者の Stephenson（1935）の開発したQ方法論は、本来、それぞれの人間が個性として無数に存在するはずのそれぞれの人間の考え方の総体を幾つかの類型としてその傾向を示すことができる。Q方法論を用いることで、例えば、血液型 ABO で性格判断をするかのようにいくつかの類型を示すことができる。

また、少ないサンプルを用いて行うことが一般的であり、その実証力には欠けるが、少ないサンプルからでも一定の仮説的なファクター（類型）を発見することができる。それに基づいて複数タイプ（類型）の人がそれぞれどのような総体的考え方をすると考えられるのか、理解することができる。

加えて、リッカート法の調査で発見することができない多様な考え方の一部を人間総体の多様な考え方を幾つかの傾向として発見できるところに大きな特徴がある。それを基に、どのような考え方の人にはどのようなアプローチを取ることが適切かを考えるアイディア発見の素材を一定のデータを基に示すことができる。

ゆえに、上記で述べたようにQ方法論は一般的なリッカート法を用いた方法と異なり、回答者たちの考え方を類型化して価値観の基軸を理解することができる。

このように、リッカート法とは異なる調査方法を用いた定住に対する考え方について調査・分析することで、全体の傾向の把握では無く、定住に関する意識についての人間の考え方の類型を見出すことが、会津若松市の有しているような地域の魅力をさらに磨いていくことが魅力的で定住したいまちとして「響く」ターゲットとなる層を見つけていくことに繋がると考えられることが、私たちがQ方法論を用いた最も重要な理由である。

では、このようなQ方法論をより理解してもらうために、下記で具体例を踏まえながらQ方法論の説明をしていく。

Q方法論では、「この質問内容が１番重要」、「この質問内容よりもこっちの方が重要」といったようなことを考えていることがわかるため、回答者の考えの総体が現れるのである。

例えば、好きな食べ物というテーマのアンケートがあったとして、食べ物に対する自分の好みの度合いを選択肢から選ぶ内容だったとする（例：寿司→「高・中・低」）。このように純粋にただ選択肢から選ぶだけであれば、その食べ物への主観的な好みしかわからない。なおかつ、このように（寿司→「高・中・低」、ラーメン→「高・中・低」）同じ回答だった場合、一般的なものの結果からはどちらがより好きであるかまではわからない。ただ一方、Q分類が伴うQ方法論の場合であれば、同じ度合いで好きな食べ物でも好みの順番に並べ替えるため、回答者のより詳細な食べ物の好みがわかる。そして、Q分類の回答が類似している人たちで分類すれば、回答者の考え方や好みを類型化して示すことができる。先程の例を引用すれば、魚料理を上位にしている人たちは魚派、肉料理を上位にしている人たちは肉派といったように回答者を類型化することができる。

ゆえに、調査結果がより詳細になるという部分で、Q方法論は一般的な調査方法と比べて一枚上手と言える。

このように、Q方法論が調査方法として非常に優れている部分と、これを会津若松市及び、東洋大学というある程度全国的に知名度があり、東日本を中心に学生が集まり卒業生も全国にいる大衆的な大学の一つで実施することで、市内の若者や学業で東京に在住する若者の定住に対する考えが直接わかるという部分で有用性を感じたため、私たちはQ方法論を実施した。

第２章　調査・分析概要

１．調査概要

私たちは現地である会津若松市内でこのQ方法論を実施するため、まずは各地で実施された定住にまつわる調査項目を基に、43 個の調査項目を厳選した。

以下が、調査項目を参考にした自治体である。

・福岡県北九州市（2019）　・鳥取県鳥取市（2020）　・長崎県長与町（2020）
・愛知県大口町（2016）　・千葉県白井市（2021）

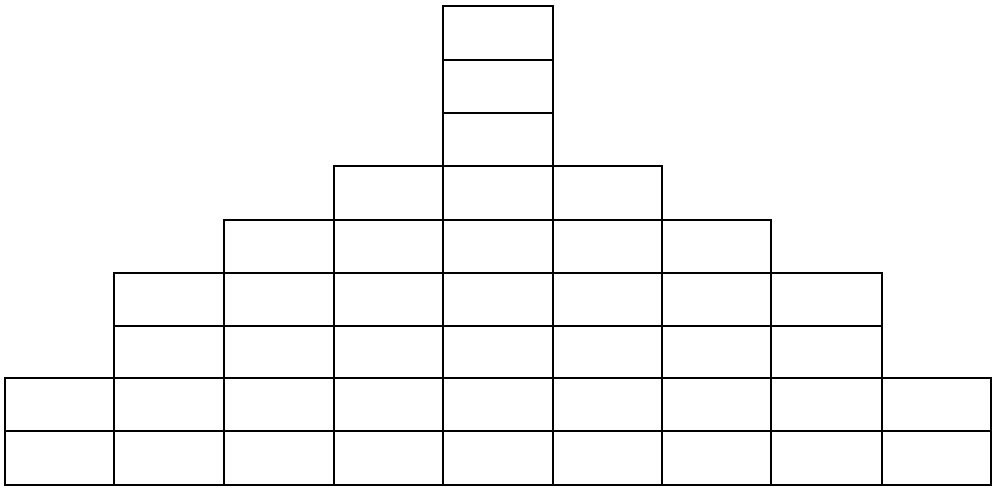
調査項目は別紙１を参照のこと

調査項目作成後、私たちは会津若松市現地に赴き、今年の 9 月 17・18・19 日の 3 日間、同市内の各所で主に若者に直接調査を依頼し、協力を得た。

なお、会津大生については、9 月 20 日から 10 月 7 日までオンラインで調査協力を募り回答を得た。

Q方法論の手法に基づいて、調査の流れは以下の通りである。

①回答者が各質問に対してどのくらい重要だと思うか、「高・中・低」から最も自分の考えに合うものを選ぶ。
②回答者は、自分の回答に基づいて、各質問内容を「非常に重要だと思うもの」・「全く重要でないと思うもの」に分けて、重要だと思う順番に並べ替える。（Q分類）
並び替える際は、Qセットのカードを重要度に応じてピラミッド型に配置されたマスに配置する。分布の形状は事前に決められており、その分布に従って順位付けを行うため、強制的に選択を行うことになる。加えて正規分布を採用するため両端に置かれるアイテム数が最も少なく、中央に置かれるアイテムが最も多くなる。（図1参照）
左側に置かれる質問ほど重要視されておらず右側に置かれている質問ほど重要視されているとして得点を付ける（-4=<X<=4 ただしXは整数とする）。
③回答の結果を分析して、主に若者が定住に対してどのような考えを抱いているかを考察する。



また、上記でも述べたが、本調査については、会津若松市民の方にだけでなく、東洋大学の学生に対しても同様に実施した。これらを踏まえ、若者の定住に対する考えを考察し、同市への若者の定住者を増やすための政策を考えていく。

第3章　分析方法

上記の調査で得たデータを集団ごと（会津中高生・会津大学生・都心大学生）に主成分分析にかけ、集団ごとに３～４つの因子を抽出した。

次にＺスコアをもとに基本的な解釈を行う。Ｚスコアは個々のデータが平均値を０として標準偏差が１になるように変換し、個々のデータが平均からどの程度離れているかを評価する尺度である。これは教育現場で良く用いられる偏差値の元のデータとなるスコアであり、たとえばＺスコアが１であれば偏差値６０、２であれば偏差値７０、逆に-１であれば偏差値４０となる。このように平均からの距離を数値で示すＺスコアを用いることで、各因子が定住に関してどのような価値観を持っているのかということを具体的に解釈できるため、本調査においてはより適切であると考えた。

１．会津中高生に関する分析結果と解釈

会津中高生のデータを分析すると次の４つの因子が抽出された。それぞれ第一因子は「地域活性型」、第二因子は「利便性重視型」、第三因子は「親心重視型」、第四因子は「ワークライフバランス型」と名付けた

（１）第一因子：「地域活性型」

地域活性型でＺスコアが高い項目は以下の通りとなった。会津中高生の第一因子に関しては、公道の整備や病院や福祉施設の充実などといったインフラの面を最重要視している。また、地域の人口が多いことや観光客が多い地域である、魅力ある街並みである事など地域が活性化されることを重視しているため「地域活性型」と名付けた。

地域活性型のＺスコアの高い項目

項目	Ｚスコア
公道等の道路がよく整備されており、安全に利用できること	1,792
観光客が多く訪れる地域である事	1.522
大きな病院などの緊急時の医療体制が整っていること	1.460
コンビニやスーパーなどが近くに存在しており、日用品の買い物が便利なこと	1.295

様々な子育てサービスが充実していること	1.246
治安が良いこと	1.193

地域活性型のＺスコアの低い項目

項目	Ｚスコア
住んでいる自治体の情報を容易に収集できること	-1.216
イオンなど、大型商業施設（複合施設）があること	-1.275
職場と自宅が近いこと	-1.290
ターミナル駅が近くに存在していること	-1.364
両親や兄弟をはじめ近しい親戚が近くにいる事	-2.146
大企業などが多く位置していること	-2.468

以下、各因子の Ｚスコアの高い項目、低い項目は別紙２に掲載しており、それらのデータを中心に観察し、解釈した。

（２）第二因子：「利便性重視型」

会津中高生の第二因子に関しては、イオンなどの大型商業施設やコンビニ、スーパーがあること、公共交通機関の充実といった生活における利便性を最重要視している一方で、神社仏閣の多さや人口の多さなどは軽視しているため「利便性重視型」と名付けた。

（３）第三因子：「親心重視型」

会津中高生の第三因子に関しては、小中学校が通わせやすい環境にあること、大学や専門学校などの教育機関の充実、治安の良さなどが最重要視されてお

り、かつ子供の学習支援や共働きの環境なども重視している傾向にある為「親心重視型」と名付けた。

（4）第四因子：「ワークライフバランス型」

会津中高生の第四因子に関しては、職場との距離、給料が良い職場があることなど、仕事に関する項目や、公道・公共交通機関などの整備、コンビニやスーパーが近くにあること、といったインフラに関する項目が重要視されている一方で、地域の知名度や伝統文化を重んじるといった要素が低いため「ワークライフバランス型」と名付けた。

2，会津大学生に関する分析結果と解釈

会津大学生のデータを分析すると次の３つの因子が抽出された。それぞれ第一因子は「生活重視型」第二因子は「安定性重視型」第三因子は「観光伝統重視型」と名付けた。それぞれの因子の Z スコアの高い項目、低い項目は別紙２に掲載している。

（1）第一因子：生活重視型

会津大生の第一因子に関しては、コンビニやスーパーへの近さ、治安の良さ、給料などの労働条件、医療体制や道路の整備を重視する類型である。他の類型と比較し、上位項目の治安の良さ以外を総体的に重視している。一方で、観光客が多く訪れる地域であること、地域に誇るべき歴史やブランド品があること、寺社仏閣施設の多さ、伝統文化や産業といった項目を重視しない類型である。地元民が暮らしやすい環境を求める類型であるため「生活重視型」と名付けた。

（2）第二因子：安定性重視型

会津大生の第二因子に関しては、行政支援、公共交通機関の充実度、伝統産業などの特色があること、小中学生を通わせやすい環境があることを重視する類型である。他の類型と比較し、行政支援、小中学校の通わせやすい環境、共働き世帯が働きやすい環境を相対的に重視する。一方で、職場が近いこと、親戚などが近くに住んでいること、公道等が整備されていること、娯楽施設の充実度はあまり重視しないため「安定性重視型」と名付けた。

（3）第三因子：観光伝統重視型

会津大生の第三因子に関しては、歴史、魅力ある街並み、伝統文化産業、教育

機関などを重視する類型である。また他の類型と比較して、観光客、魅力ある街、親や友人、老後生活、公園の整備を相対的に重視する。 一方で、地域の人口が多いこと、介護サービス、子供の学習支援、防犯防災はあまり重視しない類型であるため「「観光伝統重視型」と名付けた。

３．都心大学生（東洋大学生）に関する分析結果と解釈

東洋大学生のデータを分析すると次の４つの因子が抽出された。それぞれ第一因子は「大都市志向型」第二因子は「地方都市志向型」第三因子は「行政サービス重視型」第四因子は「共生社会重視型」と名付けた。それぞれの因子の Ｚスコアの高い項目、低い項目は別紙２に掲載している。

（１）第一因子：大都市志向型

東洋大生の第一因子に関しては、はターミナル駅や労働条件が良い、職場の近さ、複合施設の存在など日常生活をしていく上で利便性が高く、生活水準が高くなる項目が選ばれている一方、地域の特色やバリアフリー、介護サービスなどの福祉関連の項目があまり重視されていないため、第一因子は住む地域の生活の利便性の高さを求めていると推測でき、「大都市志向型」と名付けた。

（２）第二因子：地方都市志向型

東洋大生の第二因子に関しては、コンビニやスーパー、娯楽施設の充実さ、親戚の存在、学習支援の充実さなど、生活していく上で重要なものが高い項目として選ばれている一方、都会であることや働き方の多様さ、自治体情報の入手にしやすさなど、地域特有の点はあまり重視されていないため、何処に住むのではなく、住む地域の生活環境が整っている点を重視していると推測でき、「地方都市志向型」と名付けた。

（３）第三因子：行政サービス重視型

東洋大生の第三因子に関しては、防犯防災施設や保育園などの施設の充実さ、安心な老後生活、インフラ整備など、行政が提供しているサービスの充実さを重視する項目が選ばれている一方、適切な高等学校や大企業の存在、近くに住む親戚の有無などはあまり重視されていないため、第三因子は行政から提供されるサービスを重視していると推測でき、「行政サービス重視型」と名付け

た。

（4）第四因子：共生社会重視型

東洋大生の第四因子に関しては、女性の活躍や子育て、医療、教育の充実など、様々な人が活躍し安心して暮らせる環境を望むような項目が選ばれている一方、イオンなどの複合施設やレジャー・娯楽施設、公園が整備されていることなど、生活に彩りを持たせるような要素はあまり重視されていないため、第四因子は、女性や子どもなど様々な人が活躍できるような社会を望むと推測でき、「共生社会重視型」と名付けた。

第４章　施策

分析の結果会津若松の中高生、大学生、都心の大学生が定住することに対してどのようなことを重視しているのかということを把握することが出来た。その中でも定住可能性が高い因子の人をいかにして会津若松に定住させるかということが重要となってくる。

各因子を検討するうえで、「都心に近い位置にあること」、「住んでいる自治体の財政が豊かであること」、 を重要視している因子（「利便性重視型」、「大都市志向型」）については、会津への定住可能性は低く、今回の検討においては定住可能性が低いと考えた。なぜなら、「都心に近い」といったような地理的特徴や「住んでいる自治体の財政が豊かである」「人口が多いこと」といったことは行政や民間企業、市民の活動があったとしても、即自的にかつ容易に達成できるものではないからである。

また、会津大学生に関して、「安定性重視型」「観光伝統重視型」は地域の伝統文化や伝統産業を重んじており、会津若松の愛着や誇りを感じることが出来る調査結果が出ているため、一見定住可能性は高いという見方もできる。一方で、調査を行っているうえで「会津若松で就職することは考えていない」という言葉をほぼすべての学生が仰っており、定住可能性は低いかもしれない。しかしながら、地域に対する一定の愛着などをもっていることから、地域での就職の機会等があれば、この地域に定住する、あるいは、何かをきっかけとして戻ってくる可能性が見込まれる。その際に、「安定性重視型」「観光伝統重視型」が重要視する公共交通機関の利便性が高まっていることが、定住へつなげる重要な点となる。

また、東洋大生の会津への移住は困難であると考える。その理由としては、「地方都市志向」「共生社会重視型」は家族・友人を重視している。東洋大生にとっての友人・家族というのは、既にネットワークやコミュニティが築かれている都心及び地元への定住を希望してることを示していること意味しており、会津への移住は難しい。また、「行政・サービス重視型」は、行政サービスの豊かさを求めており、福島の財政指数に比べ、東京や埼玉、千

葉の方が財政力指数が高い（東京都：1.05、千葉県：0.63、埼玉県：0.62、福島県：0.38）ことを考慮すると、財政的サービスを求める「行政・サービス重視型」の若者の会津への移住も困難であると考える。

上記のように７つの因子の定住可能性は低く、この因子に向けた政策は効果が薄いと予想されるため、それ以外の４つの因子について検討していく。

まず始めに、会津中高生の「地域活性型」、会津大学生の「生活重視型」関しては、道路の整備や、大きな病院、子育ての充実といったように定住を考えるにあたっての要求が多岐にわたっている。また、この因子の人々は地域の活気を重要視しており、地域を活性化するにあたり、新たな仕掛けやそれに従事する人材も必要となってくる。「寂しい商店街を何とかしよう」　と声を上げる人材がいれば話は早いものの、即効性は低いのではないかと考えた。

次に、会津中高生の「親心重視型」について、この因子は地理的特徴（Z スコア：-1.745）や、人口が多いこと(Z スコア：-0.566)などを軽視する傾向にあり、比較的定住可能性が高い因子であると考えた。この因子では女性の働く環境や、教育、介護サービスの充実といったことが重要視されているため、そのような政策を実行することが第一に必要であると考えた。

最後に「ワークライフバランス型」について、この因子は親や友人が近くにいる事を最重要視している。会津若松の中高生は会津若松にそのようなコミュニティーが既に形成されていることが予想される。つまり、この類型に当てはまる若者をいかに会津若松に定住させるかということが重要となってくるのだ。当調査では労働条件や、職場との距離という仕事関係についてや公道の整備や公共交通機関の充実といったインフラの面を整えていくことでこの因子の定住可能性がより上がるのではないかと考えられる。

第５章　まとめ

少子高齢化や、人口減少、東京一極集中が問題視されている現在において、若者の定住人口を増加させるということはあまりにも無謀すぎる。だからといって何も手を打たなければいずれは会津若松という町自体が消滅をしてしまう。そのような会津若松をはじめとする地方都市は私たちが提案するように、第一に定住可能性の高い人々を確実に定住させることが急務である。その地域に住んでいる人が定住に対してどのような価値観を持っているのか、定住可能性が高い人は何を求めているのかということを把握し、戦略的に対策を打つことこそが最も効果的な策である。

そこでいくつかの具体的な政策を提案する

・会津市内のバスの便数や路線を増やす

・行政サービスの改善・向上

・伝統文化産物の重宝・広報
・母親の目線になって、子育てや仕事面で暮らしやすい環境を整備する

これらをもとに選ばれるまちの形成を考えていけるのではないか。

別紙１　４３の調査項目

インフラに関する項目　１１

・レジャーや娯楽施設が充実していること
・バスや電車など公共交通機関が充実している
・公道等の道路がよく整備されており、安全に利用できること
・イオンなどの大型複合施設があること
・ターミナル駅が存在していること
・コンビニやスーパーなどが近くに存在しており、日用品の買い物が便利なこと
・近くに公園が整備されていること
・防犯や防災施設が充実していること
・都心に近い位置にあること
・緑豊かな街づくりがなされていること
・魅力ある街並みである事

職業に関する項目　６

・大企業などの企業が多く位置していること
・給料などの労働条件がいい職場があること
・自分の希望する職種があること
・リモートワーク、テレワーク等の働き方ができること
・女性が充実して働ける場が地域に存在していること
・職場と自宅が近いこと

行政に関する項目　７

・子供の学習支援が充実していること
・幼稚園、保育園などの環境が整っていること
・行政からの支援を受けやすいこと
・自治会などの地域コミュニティが盛んであること
・自治会や地域コミュニティ等によるわずらわしさが少ないこと
・住んで自治体の情報を容易に収集できること
・住んでいる自治体の財政が豊かであること

暮らしに関する項目　１２

・大きな病院など緊急時の医療体制が整っていること
・様々な子育てサービスが充実していること
・治安がいいこと
・地域がバリアフリー環境になっていること
・介護サービスが充実していること
・大学、専門学校等の教育機関が充実していること
・共働き世帯が働きやすい環境が整っていること
・親や友人など頼れる人が近くにいること
・両親や兄弟をはじめ近しい親戚が近くに住んでいること
・安心した老後生活ができること
・良い、または自身や地域に見合った高等学校が地域に存在すること
・小中学校が通い（通わせ）やすい環境にあること

観光に関する項目　５
・観光客が多く訪れる地域であること
・伝統文化や産業等、守りたい地域の特色があること
・寺社仏閣等の施設が多いこと
・地域に誇るべき歴史があること
・地域の知名度が高く、地域ブランド品などがあること

その他　２
・地域の人口が多いこと
・地域の特色が小中学校の教育の中に取り入れられていること

別紙２　【各ファクターにおけるＺスコアの高い項目と低い項目一覧】

１．会津若松市中高生調査

利便性重視型　高い項目　　利便性重視型　低い項目

イオンなど、大型商業施設（複合施設）があること	2.793
小中学校が通い（通わせ）やすい環境にあること	1.583
コンビニやスーパーなどが近くに存在しており、日用品の買い物が便利なこと	1.426
バスや電車など公共交通機関が充実していること	1.400
大学、専門学校等の教育機関が充実していること	1.187
大きな病院などの緊急時の医療体制が整っていること	1.015
レジャーや娯楽施設が充実していること	0.980

寺社仏閣等の施設が多いこと	-2.013
地域の人口が多いこと	-1.647
緑豊かなまちづくりがなされていること	-1.44
両親や兄弟をはじめ近しい親戚が近くに住んでいること	-1.436
自治会などの地域コミュニティが盛んであること	-1.322
地域に誇るべき歴史があること	-1.217
観光客が多く訪れる地域であること	-1.196

親心重視型　高い項目

小中学校が通い（通わせ）やすい環境にあること	1.615
女性が充実して働ける場が地域に存在していること	1.560
安心した老後生活ができること	1.505
大学、専門学校等の教育機関が充実していること	1.302
治安が良いこと	1.293
様々な子育てサービスが充実していること	1.038
介護サービスが充実していること	1.017

親心重視型　低い項目

寺社仏閣等の施設が多いこと	-1.403
コンビニやスーパーなどが近くに存在しており、日用品の買い物が便利なこと	-1.455
両親や兄弟をはじめ近しい親戚が近くに住んでいること	-1.511
レジャーや娯楽施設が充実していること	-1.605
都心に近い位置にあること	-1.745
ターミナル駅が近くに存在していること	-1.894
公道等の道路がよく整備されており、安全に利用できること	-2.101

ワークライフバランス型　高い項目

親や友人など頼れる人が近くにいること	1.871
職場と自宅が近いこと	1.837
公道等の道路がよく整備されており、安全に利用できること	1.254
給料などの労働条件がいい職場があること	1.199
治安が良いこと	1.058
コンビニやスーパーなどが近くに存在しており、日用品の買い物が便利なこと	1.043
バスや電車など公共交通機関が充実していること	0.888

ワークライフバランス型　低い項目

地域に誇るべき歴史があること	-1.321
大きな病院などの緊急時の医療体制が整っていること	-1.56
都心に近い位置にあること	-1.651
観光客が多く訪れる地域であること	-1.822
地域の知名度が高く、地域ブランド品などがあること	-1.828
寺社仏閣等の施設が多いこと	-1.845
地域の人口が多いこと	-1.846

生活重視型　高い項目

コンビニやスーパーなどが近くに存在しており、日用品の買い物が便利なこと	1.942
治安が良いこと	1.685
給料などの労働条件がいい職場があること	1.565
大きな病院などの緊急時の医療体制が整っていること	1.514
バスや電車など公共交通機関が充実していること	1.331
公道等の道路がよく整備されており、安全に利用できること	1.201

生活重視型　低い項目

地域の特色が小中学校の教育の中に取り入れられていること	-1.293
地域がバリアフリー環境になっていること	-1.315
地域の知名度が高く、地域ブランド品などがあること	-1.418
伝統文化や産業等、守りたい地域の特色があること	-1.687
寺社仏閣等の施設が多いこと	-1.725
地域に誇るべき歴史があること	-1.804

職場と自宅が近いこと	1.101

観光客が多く訪れる地域であること	-2.044

安定性重視型　高い項目

行政からの支援を受けやすいこと	2.001
バスや電車など公共交通機関が充実していること	1.512
地域に誇るべき歴史があること	1,469
伝統文化や産業等、守りたい地域の特色があること	1.456
小中学校が通い（通わせ）やすい環境にあること	1.452
コンビニやスーパーなどが近くに存在しており、日用品の買い物が便利なこと	1.295
大学、専門学校等の教育機関が充実していること	1.099

安定性重視型　低い項目

親や友人など頼れる人が近くにいること	-1.097
都心に近い位置にあること	-1.149
自分の希望する職種があること	-1.200
レジャーや娯楽施設が充実していること	-1.291
公道等の道路がよく整備されており、安全に利用できること	-1.345
両親や兄弟をはじめ近しい親戚が近くに住んでいること	-1.670
職場と自宅が近いこと	-1.893

観光伝統重視型　高い項目

観光客が多く訪れる地域であること	2.402
地域に誇るべき歴史があること	1.804
魅力ある街並みであること	1.655
治安が良いこと	1.533
伝統文化や産業等、守りたい地域の特色があること	1.307
大学、専門学校等の教育機関が充実していること	1.089

観光伝統重視型　低い項目

両親や兄弟をはじめ近しい親戚が近くに住んでいること	-1.082
共働き世帯が働きやすい環境が整っていること	-1.222
子供の学習支援が充実していること	-1.301
防犯や防災施設が充実していること	-1.344
住んでいる自治体の情報を容易に収集できること	-1.413
地域の人口が多いこと	-1.765

親や友人など頼れる人が近くにいること	0.987

介護サービスが充実していること	-2.108

大都市志向型　高い項目

治安が良いこと	1.753
バスや電車など公共交通機関が充実していること	1.706
大きな病院などの緊急時の医療体制が整っていること	1.585
コンビニやスーパーなどが近くに存在しており、日用品の買い物が便利なこと	1.458
ターミナル駅が近くに存在していること	1.067
都心に近い位置にあること	1.025
給料などの労働条件がいい職場があること	1.021

大都市志向型　低い項目

自治会などの地域コミュニティが盛んであること	-1.185
地域の知名度が高く、地域ブランド品などがあること	-1.517
伝統文化や産業等、守りたい地域の特色があること	-1.553
地域の特色が小中学校の教育の中に取り入れられていること	-1.576
地域に誇るべき歴史があること	-1.652
観光客が多く訪れる地域であること	-1.924
寺社仏閣等の施設が多いこと	-2.03

地方都市志向型　高い項目

治安が良いこと	2.061
コンビニやスーパーなどが近くに存在しており、日用品の買い物が便利なこと	1.925
親や友人など頼れる人が近くにいること	1.837
レジャーや娯楽施設が充実していること	1.503
両親や兄弟をはじめ近しい親戚が近くに住んでいること	1.075

地方都市志向型　低い項目

住んでいる自治体の情報を容易に収集できること	-1.12
地域の人口が多いこと	-1.149
地域の知名度が高く、地域ブランド品などがあること	-1.392
大企業など企業が多く位置していること	-1.547
都心に近い位置にあること	-1.611

小中学校が通い（通わせ）やすい環境にあること	1.016
バスや電車など公共交通機関が充実していること	0.939

観光客が多く訪れる地域であること	-1.939
寺社仏閣等の施設が多いこと	-2.006

行政サービス重視型　高い項目

安心した老後生活ができること	1.998
防犯や防災施設が充実していること	1.774
大きな病院などの緊急時の医療体制が整っていること	1.672
治安が良いこと	1.613
バスや電車など公共交通機関が充実していること	1.481
幼稚園、保育園などの環境が整っていること	1.153
コンビニやスーパーなどが近くに存在しており、日用品の買い物が便利なこと	1.065

行政サービス重視型　低い項目

自治会などの地域コミュニティが盛んであること	-1.130
給料などの労働条件がいい職場があること	-1.193
良い、または自身や地域に見合った高等学校が地域に存在すること	-1.348
魅力ある街並みであること	-1.459
自分の希望する職種があること	-1.613
両親や兄弟をはじめ近しい親戚が近くに住んでいること	-1.963
大企業など企業が多く位置していること	-2.128

共生社会重視型　高い項目

治安が良いこと	2.288
大きな病院などの緊急時の医療体制が整っていること	1.756
親や友人など頼れる人が近くにいること	1.542
女性が充実して働ける場が地域に存在していること	1.372
様々な子育てサービスが充実していること	1.137

共生社会重視型　低い項目

地域の知名度が高く、地域ブランド品などがあること	-1.095
イオンなど、大型商業施設（複合施設）があること	-1.223
大企業など企業が多く位置していること	-1.266
緑豊かなまちづくりがなされていること	-1.363
近くに公園が整備されていること	-1.700

小中学校が通い（通わせ）やすい環境にあること	1.081
共働き世帯が働きやすい環境が整っていること	1.056

レジャーや娯楽施設が充実していること	-1.754
魅力ある街並みであること	-1.951

参考文献

（１）　林　嶺那・深谷　健・箕輪允智・中嶋茂雄・梶原静香（2020）『Q方法論（Qmethodology）の行政学への応用』https://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005405/2-552.pdf（2024年10月17日最終確認）

（２）　公益財団法人・特別区協議会ホームページ『特別区の人材育成に資する基礎研究～特別区職員の仕事観及び組織内の社会的関係～特別区制度研究会報告書第６期』https://www.tokyo23city.or.jp/chosa/seidokenkyu/documents/dai6ki_zinnzaiikuseinisisurukisokekyuu.pdf（2023年10月12日最終確認）

（３）　箕輪允智「自治総研」（2023a）『都道府県公務員の仕事観：Q方法論による主観性の解明と都市公務員との比較考察から』https://doi.org/10.34559/jichisoken.49.540_1（2024年10月12日最終確認）

（４）　箕輪允智（2023b）『都市公務員の仕事観：Q方法論による主観性の探索的分析』https://doi.org/10.34559/jichisoken.49.537_1（2024年9月13日最終確認）

（５）　福岡県北九州市ホームページ（2020）『北九州市「若者意識調査」アンケート報告書』https://ssl.city.kitakyushu.lg.jp/files/000877113.pdf（2024年9月13日最終確認）

（６）　鳥取県鳥取市ホームページ（2020）『資料１若者移住定住施策について』https://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1601424362248/simple/izyuteizyu.pdf（2024年９月13日最終確認）

（７）　長崎県長与町ホームページ（2020）『第10次長与町総合計画策定に向けた若者アンケート調査』https://webtown.nagayo.jp/kiji00352/3_52_2_wakamono.pdf（2024年９月13日最終確認）

（８）　愛知県大口町ホームページ（2016）『若い世代が住みやすいまちに関するアンケート報告書（案）』https://www.town.oguchi.lg.jp/secure/7646/9kaishiryou4.pdf（2024年９月13日最終確認）

（９） 千葉県白井市ホームページ（2023）『若い世代の移住・定住に関するアンケート 2021 結果』https://www.city.shiroi.chiba.jp/material/files/group/8/202304-1.pdf（2024 年 9 月 13 日最終確認）

（10） 栃木県那珂川町ホームページ（2014）『若者定住意向アンケート調査結果』https://www.town.tochigi-nakagawa.lg.jp/06seisaku/03sougou/files/09sankousiryou1-2.pdf（2024 年 9 月 13 日最終確認）

（11） 三重県志摩市ホームページ（2023）『伊勢志摩地域における進路や将来的な定住の意向に関する高校生アンケート調査結果報告書』https://www.city.shima.mie.jp/material/files/group/34/R5houkokusyo.pdf（2024 年 9 月 13 日最終確認）

（12） 山梨県北杜市（2021）『若者世代アンケート結果』https://www.city.hokuto.yamanashi.jp/fs/3/5/5/3/7/3/_/07_____Web_____FIN211121.pdf（2024 年 9 月 13 日最終確認）

（13） 人工戦略会議(2024) 『令和 6 年度・地方自治体「持続可能性」分析レポート』https://www.hit-north.or.jp/cms/wp-content/uploads/2024/04/01_report-1.pdf）

（2024 年 10 月 15 日最終確認）

（14） Ho, G. W. K. (2017)『Examining Perceptions and Attitudes: A Review of Likert-Type Scales Versus Q-Methodology. Western Journal of Nursing Research, 39(5), 674-689』

（15） Stephenson, W. (1953) 『The Study of Behavior: Q Technique and its Methodology. University of Chicago Press』